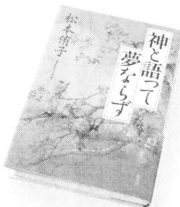


幕府に敢然と戦いを挑んだ、庄屋と農民たちの姿

『神と語って夢ならず』



松本侑子

光文社
1890円

幕末から明治維新、これが日本の最後の内乱期である。それも昨日の敵は今日の味方。官軍と賊軍の名称が毎日入れ替わるといって、激しく生きにくい時代であつたろうと推測する。幕府側なのか朝廷側なのか、それさえも藩の指導者の態度でころころ変わる。市井の人々はただ蹂躪されるだけだ。

しかし、それを許すまじと蜂起した人々がいた。

自治政府を目指した戦いを描いた『神と語って夢ならず』には、松江藩の庄屋に苦しむ隠岐島の庄屋が農民たちとともに敢然と戦いを挑んだ姿が描かれている。

江戸時代、北前船などの交易船のおかげで日本海側は大変栄えていた。

ロシア船やイギリス船も頻繁に現れ、その防衛のための人手も資金も、島で賄わねばならず、頼みの松江藩の代官は威張るばかりで頼りにならない。

加えて、この島は後鳥羽上皇や後醍醐天皇が流された場所でもあり、勤王の志を持つ者が多かった。その中で島後、加茂村の庄屋の息子、井上惣介も京都で儒学を学んだ。松江藩は佐幕派、その隣の鳥取藩は水戸藩の流れを組む勤王派と、志の違いが藩の

姿勢となり、島前と島後、二つの島である隠岐国の中でさえ、考え方をまとめることが難しかった。

攘夷の思想は、あるところまでは堅固でなければならなかった。しかし最前線で防衛を義務付けられていた海岸線や島では、気が付いたときには開国され、異人との交渉が始まっていることさえ知らされず、いつの間にか時代遅れになっていた。

何度裏切られても、隠岐の人たちは暴力を使わなかった。松江藩の武士に撃たれ斬られたが非抵抗を貫いた。目の前で友を殺されても生き残り、日本が変わっていく様を見続けた惣介は長く生きた。はたして彼の眼には、この国はどう映っていたのだろうか。

大河ドラマ主演俳優の正直な日記

人の日記は面白い。その人の本性を覗き見するような気持ちになるからだろうか。昨年のNHK大河ドラマ『平清盛』を主演した男の日記は正直だ。大震災、ボランティア、女優の小雪との結婚、そして子供が生まれる。わい、という一人称で語る大河の日々は、いつも動いている。若いゆえの気負いが打ち砕かれ、失敗を後悔し、新たに演技を考える。

タイトルの『敗者』の意味は深い。彼は一年演じた清盛のエネルギーを受けて、大きな役者になるに違いない。

『敗者』松山ケンイチ（新潮社） 1470円